

綾歌町内遺跡発掘調査報告書

第 7 集

平成 14 年度国庫補助事業報告書
快天山古墳

2003. 3

綾歌町教育委員会

はじめに

我が綾歌町には、縄文時代晚期以降の各時代に先人の手によって築かれた文化遺産が数多く残されています。中でも弥生時代後半期から古墳時代前半期にかけては、近年の発掘調査によって、かなり密度の高い内容であることが確認されています。町及びその他の開発事業等に伴って発掘調査された様々な遺跡について、更に調査研究を重ね、古代の生活等を明らかにするとともに、遺跡の保護・活用を図り、永く後世に伝えることは、私達に課せられた使命であると考えます。

綾歌町教育委員会では、平成8年度から国庫補助ならびに県費補助によって綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても、継続して実施した調査成果として、この報告書を発刊することになりました。

今年度は、前期古墳として四国を代表する快天山古墳の確認調査を実施し、これまでに実施されている調査成果の補足とともに、快天山古墳の本格的調査に向けた基礎調査としました。快天山古墳は、国内最古の削抜式割竹形石棺を3基保有しています。規模的にも前期古墳としては中・四国最大であり、本古墳の内容解明が香川県の古墳形成時期の社会背景を解明する手がかりになるとと考えています。

これからも、我が綾歌町に所在する貴重な文化遺産を、後世に伝えていくためにも、調査の成果が貴重な資料として活用されることを望みつつ、当事業の継続的な実施を予定しております。

最後になりましたが、これらの調査に当たりましてご理解とご指導をいただきました関係各位、また調査にご協力とご援助をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月31日

綾歌町教育委員会教育長 土岐道憲

例　　言

1. 本書は、綾歌町教育委員会が、平成14年度国庫補助事業として実施した綾歌町内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、快天山古墳を対象とした。
3. 本書の実測図の縮尺は、すべてスケールで表示した。また遺構実測図中の方位は、國土座標第IV系による方位で示した。
4. 出土遺物及び図面は、綾歌町教育委員会に保管している。
5. 本書第2章の執筆・構成は大久保徹也（徳島文理大学）が担当し、他は近藤武司が担当した。また全体の編集は近藤が行った。
6. 快天山古墳試掘調査・墳丘確認調査にあたっては、徳島文理大学助教授大久保徹也氏及び徳島文理大学学生諸氏のご指導・ご協力を得た。ここに記して謝意を表する。
7. 押図については、国土地理院の25,000分の1地形図を調整した綾歌長官内図（承認番号 四複第134分）及び綾歌町航空測量図を使用した。

目 次

本 文 目 次

第Ⅰ章	平成14年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要	1
第Ⅱ章	快天山古墳測量調査・墳丘確認調査	3
1.	立地と環境	3
2.	調査の経緯	5
3.	各調査区の概要	7
4.	調査の概要	8
第Ⅲ章	まとめ	37

挿 図 目 次

第1図	平成14年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地	2
第2図	快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓	4
第3図	快天山古墳調査区配置図	6
第4図	前方部全面調査区配置図	7
第5図	第7トレンチ 平・断面図	8
第6図	第9トレンチ 平・断面図	9
第7図	前方部東面調査区配置図	11
第8図	前方部東面調査区（11～13トレンチ）平・立面図	12
第9図	前方部東面断面図	13
第10図	火葬墓平・断面図（第11トレンチ）	14
第11図	円筒埴輪（1／2）	20
第12図	円筒埴輪（1／2）	21
第13図	壺形埴輪	24
第14図	火葬墓関連資料他	25
第14図	快天山古墳墳丘想定図	27

図 版 目 次

写真 1 前方部前端調査区・前方部東面調査区 1	
図版 1 第 7 ~ 9 トレンチ全景 (北から)	3 0
図版 2 第 9 トレンチ全景 (東から)	3 0
図版 3 第 7 トレンチ全景 (北から)	3 0
図版 4 第 7 トレンチ前端区画溝南肩 (西から)	3 0
図版 5 第 1 2 トレンチ第三斜面葺石 (東から)	3 0
図版 6 第 1 1 ~ 1 3 トレンチ全景 (南から)	3 0
写真 2 前方部東面調査区 2	
図版 7 第 1 2 トレンチ第一段斜面葺石 (東から)	3 1
図版 8 第 1 1 ~ 1 3 トレンチ第一・二段斜面葺石	3 1
図版 9 第 1 1 ~ 1 2 トレンチ第一・二段斜面葺石 (北から)	3 1
図版 10 第一段斜面葺石 (北から)	3 1
図版 11 第 1 1 トレンチ第一段斜面葺石屈折部	3 1
図版 12 第 1 3 トレンチ第一段テラス埴輪設置状況	3 1
写真 3 前方部東面 火葬墓	
図版 13 火葬墓壙半裁状況	3 2
図版 14 火葬墓壙掘下状況	3 2
図版 15 火葬墓壙完掘状況	3 2
図版 16 火葬墓壙完掘状況	3 2
図版 17 第 1 1 トレンチ火葬墓検出位置 (丸印の部分)	3 2
写真 4 3 トレンチ拡張区・第 1 4 トレンチ	
図版 18 第 3 トレンチ拡張区全景 (西から)	3 3
図版 19 第 3 トレンチ拡張区盛土立制状況 (東から)	3 3
図版 20 第 3 トレンチ拡張区壇丘上半部の盛土	3 3
図版 21 第 1 4 トレンチ全景 (西から)	3 3
図版 22 第 1 4 トレンチ第二段斜面葺石・樹立埴輪 (南から)	3 3
図版 23 売輪設置状況	3 3
図版 24 第 1 4 トレンチ第一・二段斜面葺石 (西から)	3 3
写真 5 出土遺物 1	
図版 25 円筒埴輪	3 4
写真 6 出土遺物 2	
図版 26 壺形埴輪・円筒埴輪	3 5
写真 7 火葬墓関連遺物	
図版 27 蔵骨器 (第 1 4 図 - 3)	3 6
図版 28 墓壙内出土師器皿 (第 1 4 図 - 2)	3 6
図版 29 八棱鏡	3 6

第Ⅰ章 平成14年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要

平成8年度から国庫及び県費補助金によって、綾歌町内に所在する遺跡の確認調査を実施しており、今年度についても同事業を継続して実施することになった。

国庫補助金申請については、平成14年4月11日付けで提出し、平成14年5月30日付けで交付決定を受けた。

県費補助申請についても、同じく平成14年4月11日付けで提出し、平成14年6月14日付けで交付決定を受けた。

今年度については、栗熊東字若狭所在の快天山古墳墳丘確認調査を実施した。

快天山古墳は、昭和25年香川県教育委員会が発掘調査を実施し、その内容は、「香川県史跡名勝天然記念物調査報告書第15」(昭和26年)に記載されている。さらに、昭和26年京都大学考古学教室が再調査を実施している。

快天山古墳は、その主体部を中心とした内容について全国的に見ても非常に重要な性格であるが、特段の保護措置がなされていなかった。近年になり地元の保存及び保護に対する活動が活発になってきており、平成11年2月5日付けで綾歌町史跡として指定を受けることとなった。

町教委としては、快天山古墳が町指定史跡となったことで文化財保護における網掛けはできたと考えているが、より良い保存及び活用に向けた整備を進めるためにはできる限り早い時期に土地の公有化を図ることが先決であると考えており、町指定のみならず上位指定を受けるのが適当であるとの判断から、これまで不確定であった墳丘の形状及びその規模また、構造についての確認をするための調査を昨年度から実施することとした。

調査方法は、墳丘の規模形状を確認するために、まず平板による地形測量を昨年度実施した。その段階で快天山古墳は前方後円墳であることの推測を立てて、検討した箇所に試掘トレチを設定した。

その結果、快天山古墳の後円部の南先端部及び西側で埴輪と考えられる地山の傾斜変換点が確認できた。また、西側前方部のくびれ部付近では葺石とテラス部を、また、そのテラス部には樹立した円筒埴輪を確認することができた。

更に、前方部西斜面では、1・2段目の葺石列とその間のテラス部に樹立する円筒埴輪を検出した。

これらのことから総合して考えると、快天山古墳は全長100m、後円部径約63mの前方後円墳であることが判明した。構造としては、少なくとも前方部に埴輪を並べたテラスが所在し、その斜面部には葺石が敷き詰められていることが確認された。また、後円部の上半部は盛土で形成されていることも確認された。昭和に行われた調査の内容と併せて考えると、快天山古墳の築造時期については古墳時代前期後半で、当時の前方後円墳としては四国最大規模を誇るものであることが確定された。

以上、町内1箇所で発掘調査を実施し、掘削による調査総面積は142m²であった。

平成14年度の町内遺跡発掘調査事業は、平成14年4月1日より実施し、平成15年3月31日に終了した。

第1図 平成14年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地



快 天 山 古 墳

第Ⅱ章 快天山古墳確認調査

調査対象地 綾歌町栗熊東字若狭
調査期間 平成14年4月2日～平成15年3月25日
調査面積 142m²

第1節 快天山古墳の立地と環境（第2図）

1. 立地と環境

快天山古墳は北緯 $33^{\circ} 53' 35''$ 、東経 $34^{\circ} 53' 35''$ に位置する。四国北東部の讃岐地域は、燧灘に面した三豊平野・備讃瀬戸に面して東西に並ぶ高松平野・丸亀平野、および播磨灘に面した東部海岸平野群と後輩内陸平地群から成り立つが、快天山古墳はこのうち丸亀平野の南部に所在する。平野東縁を画する城山・横山山塊最南端の丘陵上にあって、大東川、綾川のほぼ分水界に位置する。山塊の南縁は細かく開析され小丘陵が手指状に並ぶが、本古墳はそうした丘陵先端部の一つを利用して築かれた大形の前方後円墳である。東方の綾川水系上流域に広がる羽床盆地に対する眺望は堤山等に遮られその一部を垣間見るに過ぎないが、南～西方向の視界は概ね開け、大東川上流域の栗熊・富熊地域から岡田台地一帯を広く見渡すことができる。

古墳は後円部を南、すなわち丘陵先端に向かって、前方部を北に向ける。後円部頂の標高75.3mを測り、周囲の水田面との比高はおよそ40mで、南方の平地側からは後円部の圧倒的な質感を仰ぎ見ることができる。

北方の横山山塊の高所には、横山経塚、奥川内、陣ノ丸、地神山といった古墳群が分布する。このうち横山経塚古墳群は少なくとも2基の前方後円墳を含む積石塚墓群である。また陣ノ丸古墳群では2基、奥川内古墳群では1基の盛土前方後円墳を含む。これらの前方後円墳はいずれも軸長40m以下で立地等から古墳時代前期に遡ると見られ、快天山古墳に先行する可能性が高い。地神山古墳群は中期後半～後期前半に下ると見られ、小型前方後円墳を含むというが、その内容は詳らかではない。

これに対して丘陵南縁にはより劣位の無墳丘箱式石棺もしくは小型古墳が散在する。快天山古墳に近接した尾根伝いの北方約100mの地点には、安山岩板石で構築した精緻な竪穴石槨を中心主体とする墳形・規模不詳の薬師山古墳がかつて存在した。東隣尾根先端の住吉神社背後からは箱式石棺が見つかっている。これらに関する情報は乏しいが、その多くは中期前半以前に比定しうるものと見られる。さらに快天山古墳前方部に接して5基の箱式石棺群が開墾時に確認されており、うち1基から小型倭製鏡が出土している。また後円部南斜面の開墾時にも硬玉製勾玉の出土が伝えられており、位置関係からこれらは本墳に從属する埋葬群と位置づけられる可能性が高い。

また栗熊低地を挟んで南方の高見峰山麓には小型前方後円墳を含む石塚山墳墓群・平尾墳墓群や、定蓮池東墳墓群・休場池東丘墳墓群・原竜王山古墳群などの複数の小規模墳墓群が分布する。これらの形成は墳時代前期を中心とし、定蓮池東、平尾墳墓群のように始点が弥生後期に遡るものも含む。現時点では横山山塊の墳墓群より形成開始が早いようであるが、やはり中期後半以降には継続しないようだ。



第2図 快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓(S=1/50000)

中期後半～後期前半の墳墓群は羽床盆地縁辺部と岡田台地に集中し、横山山塊・大高見峰北麓では希薄となる。羽床盆地では段丘縁辺部に円墳が群集し、その中には津頭東・東頭西・末則古墳などの規模・装備の点で他を圧倒するものも認められる。また最近になって3基の小型前方後円墳が確認されている。少なくとも内一基はこの時期に位置づけられる可能性が高い。津頭東古墳の築造が前期に遡るもの、大多数は中期後半から後期前半の所産となる。同様に岡田台地でもその時期に車塙古墳を盟主とする万塙古墳群が形成される。

後期後半段階には、宇閉神社古墳などの横穴式石室墳が再び大高見峰北麓に築かれるが、

大規模な群集は認められない。

いずれにしても快天山古墳に匹敵する傑出した規模の墳墓は、その前後には認められない。また快天山古墳の築造時期に小型前方後円墳の築造が停止し、以後も円墳が主体となる点は注意しておく必要があるだろう。

2. 快天山古墳の現況

快天山古墳背後の丘陵一帯は1970年代に大規模な農地開発の対象となり、その影響は残念ながら本墳前方部まで及んでいる。この部分では尾根頂部が削平開墾されると共に農道整備と養鶏場の設置で前方部の中程が切断され、農道西側の前方部側面は厚い建設残土の堆積に覆われている。この折に前方部に接した箱式石棺群も滅失したとされる。また近年では丘陵裾には新興住宅地が広がりつつある。しかし、墳頂には本古墳の名称の謂れとなった旧円福寺の僧侶快天以下の墓石が並び、後円部南斜面に佐吉神社御旅所が設けられていることもある。後円部へくびれ部は戦前から戦後の一時期にかけて畠地化されたものの、現在は山林に覆われ、前方部ほどの極端な変容を蒙っていない。

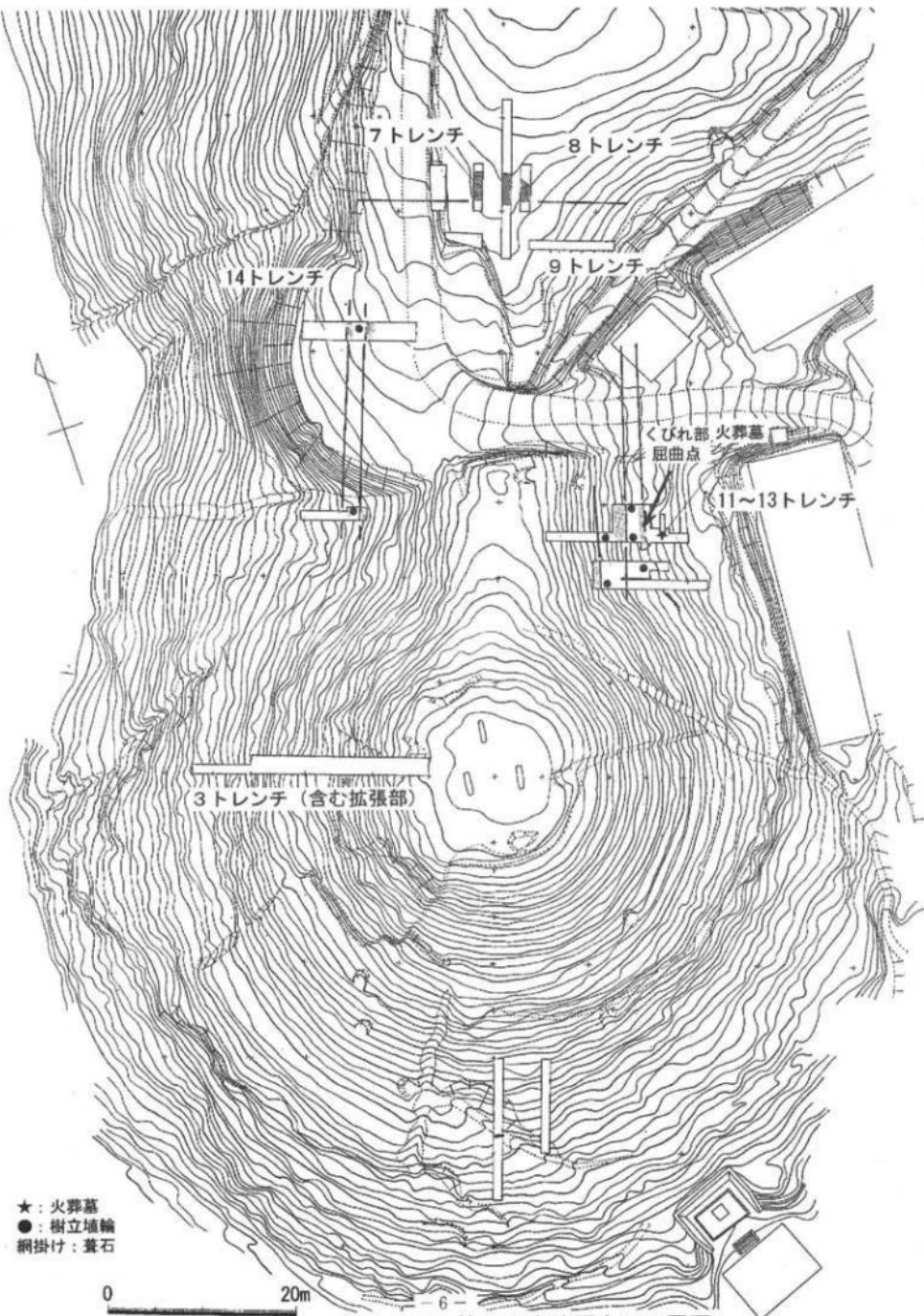
後円部東～南斜面の広い範囲は墳頂平坦面に接する部分まで、かつて開墾されて細かな畝の痕跡が整然と並ぶ。また墳丘裾付近は連続的に切り込まれ、やはり畠地を造成した形跡が残る。西斜面では同様の痕跡は顕著ではないが、上半部の隨所に土砂崩落痕跡が認められ、畠地化していない分墳丘の自然崩壊が目につく。後円部斜面のこうした状況に比べ、東西両側面ともにくびれ部～前方部南半部は最も本来的な形状が保たれているようだ。

第2節 調査の経緯

1. 本年度調査の意図（第3図）

昨年度の調査では墳丘規模の確認を主目的として墳丘主軸上の2地点—前方部北端と後円部南端—にトレントを設定した。また合わせて後円部と前方部西面で墳端位置の確認を試みた。後円部南端では2本のトレントを設定して作業を進めたが、畠地開墾によって墳端部が既に失われており、地形および開墾状況から間接的に墳端位置を類推することを余儀なくされた。また前方部前端位置についても同様に2本のトレントを設定して検出につとめたが、区画溝の設定を反映する材料は得たものの畠地利用時の攪乱が激しく、確定的とは言い難い状況にあった。幸い前方部西面の調査（2トレント）では斜面葺石と樹立埴輪などを検出し、墳端位置を推し量る重要なデータを得られた。後円部西面（3トレント）についても墳丘の自然崩壊が著しかったもの地山成形の痕跡と崩落した葺石の状況などから一定の推測が可能となった。

このような前年度調査の成果を承けて、今年度調査では二つの目標を掲げた。第一の目標は、再度、前方部前端位置の検出を試み、前方部墳端を確定することである。第二には見かけ上、後円部ほど墳丘斜面が開墾された形跡が少ない前方部において、墳丘構造・外表施設の状況を明らかにすることである。昨年度の前方部西面2トレントでかなり良好な状況で葺石と埴輪列の遺存を確認したことから前方部斜面の遺存には大きな期待が寄せられた。



2. 調査の経過

年度当初の4月に前方部前端の再確認を目的として小規模な第2次調査を実施した。7~10トレンチの計4本(25m²)を設定して調査を行った。続いて5月に夏期の本格的な展開に備えて予備的に前方部東側面にトレンチ(11トレンチ 16.8m²)を設定して、この部分の遺存状況を予備的に観察した。(第3次調査)

7~8月には前方部~くびれ部東側面の墳丘構造確認を試み第4次調査を実施した。12・13トレンチおよび11トレンチの再掘削と若干の拡張を合わせ46.5m²の調査を行った。この調査では途中、現地説明会を開催し300人以上の参加者を得た。

明けて2月~3月の第5次調査では、墳丘西側面に移動して昨夏1次調査の3トレンチの拡張と、あらたに14トレンチを設定して西側面における墳丘構造・外表施設の確認を試みた。とくに3トレンチの拡張は次年度計画している後円部墳丘構造の確認作業に向けた予備的調査と位置づけることができる。

第3節 各調査区の概要

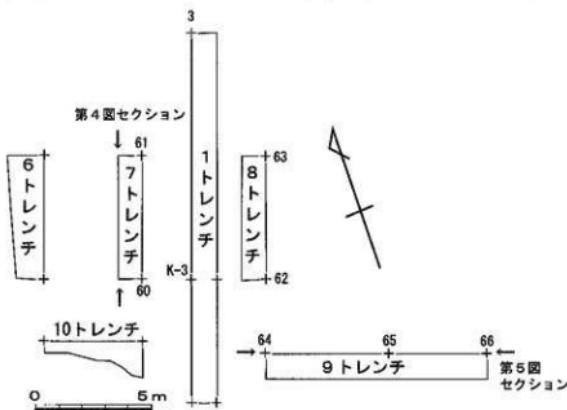
1. 7トレンチ：前方部前端 (第4・5図)

設定の意図：先年の調査で前方部前端ラインを確認するために第1トレンチと第6トレンチを設定した。これらのトレンチから墳壙位置について一定の推測をおこなったが、擾乱が甚だしく確証を得るには至らなかった。そのため前端ラインの再確認を目的として設定した調査区である。

設定位置：至夏に設定した墳丘主軸上の1トレンチと並行して、西側で農道に接する6トレンチの中間、K3杭西3mを南北隅とする南北延長5m、幅1mのトレンチである。

成果：前方部前端を画すると見られる、主軸に直交して東西に伸びる浅い落ち込みを検出した。落ち込みは幅3.4m深さ0.4mを測り、底面の標高は73.1m前後となる。

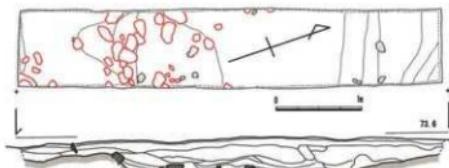
落ち込みの南肩はトレンチ南端から1.2mに位置し、ほぼ平坦な底面は幅2.4m程と



第4図 前方部前面調査区配置図

なる。落ち込みの北肩に比べ、南肩つまり墳丘側の勾配が僅かにきつい。南肩から底面にかけて地山面直上に暗褐色～黒褐色のシルト・細砂が堆積し、北に向けて次第に薄くなり落ち込み中央付近で途切れる。同層が広がるおよそ幅1.5m程の範囲、とくにその南肩寄りでは掌大～小児頭大の亜円機が比較的まとまってみられ、その間に埴輪片も多いが、須恵器などより新しい時期の遺物は含まない。こうした点から、この落ち込みは快天山古墳前方部前端を区画する溝と考える。南肩付近に包含される疊は葺石材であろうが、それらの間には明らかに埴輪片を噛み込んでおり、また規則的な配列も見出せないので、いずれも上方から転落したものと推測する。この理解が正しければ葺石は全面の区画溝基底まで葺き下ろしていないことになる。また原位置ではないがある程度の埴輪片が出土していることから前方部前端部分に埴輪列が巡る可能性は高いであろう。

さて、この区画溝が褐色砂などではほぼ埋没した後に中央から北半部にかけてあらためて幅1m弱の東西方向の掘り込みが設けられ、この部分には須恵器などより新しい時期の遺物ごく少数が含まれる。1950年調査時の平面図に記された前方部前面を横切る小径ないしはその前身の可能性がある。



第5図 7トレンチ平断面図

出土した埴輪はいずれも円筒埴輪で大部分が細片化し全形を窺えるものはないが、破片各部の形状や製作技法などは快天山古墳他地点出土埴輪と異なるところはない。また壺型埴輪・土師器類と判断できる資料は本調査区では見出せない。

2. 8トレンチ：前方部前端（第4図）

設定の意図：7トレンチと同様に前方部前端ラインの追求を目的とする調査区である。

設定位置：昨夏に設定した墳丘主軸上の1トレンチと並行に、1mの間隔を空けて東側に設定した。これより東寄りでは地形的に緩やかに東に下り始めかつ畠地の造成痕跡が見て取れるので、墳丘前端線が既に消失している可能性が高いと考え、あえて1トレンチに近接した地点を選んだ。K3杭東2mを南西隅として南北延長5m幅1mの調査区となる。

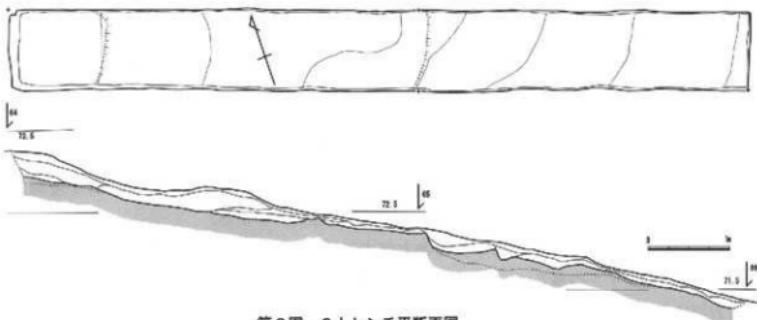
成果：昨年の1トレンチと同様に一面に擾乱が重複する。錯綜する擾乱部分の間に先行する浅い落ち込みが存在するようにも見えるが確定的ではない。トレンチ中央の幅2m余りの範囲では、南北に比べ全体に地山面が不規則に窪む。この上部の堆積層の観察で断定することは難しいが、底面は凸凹が著しくこれ自体擾乱の累積である可能性は高い。しかしこの窪みでは周囲より多めに埴輪小片が出土していることは注意しておきたい。度重なる擾乱によって旧状の把握が困難であるが7トレンチから続く前端区画溝の残欠か、少なくともそれがこの地点まで連続することを間接的に反映する可能性がある。こうした状況も昨年度調査の1トレンチと全く同じである。なお本トレンチ中央部の擾乱もしくは区画溝残欠の可能性がある窪み底面は最深部でも標高73.2mを測り、7トレンチ区画溝底面

よりわずかに高い。この典も区画溝による前方部前面の遮断が、相当に簡略的であることを示唆するであろう。若干の埴輪片と破碎された葺石材が出土したが、形状を詳細に観察できる資料はない。

3. 9トレンチ：前方部前面付近の東側面（第4・6図）

設定の意図：1・6～8トレンチで前方部前端ラインを確認したことを承けて、前端寄りの前方部側面遺存状況を確認することを目的とした。前方部西面は農道によって削平されるか残土を積み上げているため、とりあえず前方部東面の残存状況の確認を先行した。この部分も標高71m以下は農道と鶏舎の設置で大きく削られるが、比較的旧状をとどめると思られた頂部寄りの高い位置で、側面施設の残存、および前面区画溝との関係追求を期待した。

設定位置：8トレンチ南端から南2m、1トレンチから東2mを北西隅としてそこから両トレンチと直交して東に延長9m幅1mで設定した。この地点では前方部頂の平坦面東縁から緩やかに下降する東斜面部に相当する。トレンチの東端は斜面中位を巡る農道にほぼ接する。



第6図 9トレンチ平断面図

成果：地表面観察でも畠地区画と見られる低い段が確認できたが、表土下の浅い位置で階段状に整えられた地山面を検出し本地点は比較的近年に畠地に開墾されていることが判明したが、その形状から大幅な地形変化は蒙っていないことが推測される。遺物は遊離状態の埴輪片少數が出土したにとどまる。

墳丘測量図に照らせば明瞭であるが、7トレンチ他の所見から推測される前方部前端と、11トレンチ他で確認した前方部東側面墳壠ラインを結べば、本トレンチ設定位置が前方部墳丘の西側面に該当することは明らかであるが、この部分で前方部の形状を直接的に反映する材料は得られなかった。しかしこの地点で検出した地山面レベルが予想以上に高く、かつその勾配が緩やかであったこと、つまり東にやや張り出した形状であることを確認できた点は、前方部前端付近の形態復元に一定の示唆を与える。11～13トレンチで確認したくびれ部より前方部東側面の形態とこの点を整合的に捉ようとすれば、一つは、前方

部前半少なくとも東側面は外に強く開く、いわゆる撥形を呈する可能性を示すことになる。あるいは逆に東側面の加工が前端付近では大幅に省略されて自然地形の張り出しせどそのまま残していると推測することも可能であろう。今回の調査成果からはいずれとも決しがたいが、少なくとも前方部前端がシンメトリーな柄鏡形を呈する可能性は排除できるであろう。

4. 10 トレンチ：前方部前面付近頂部（第4図）

設定の意図：この地点は農道の東面に接して前方部頂の高まりを不規則に抉った部分の北面にあたる。大幅な改変が予測されたが、7トレンチの成果を承けて前端部付近頂部から西側面に至る部分の遺存状況を確認するために設定した。

設定位置：7トレンチの南2m、1トレンチの西2mを起点に西に東西延長4m、最大幅1.5mで設定した。

成果：トレンチ東半部では表土直下にごく薄い間層を介して地山面を検出したが、西寄り1.5m部分では地山面が一段下がり、その上部には攪拌された花崗岩ばい乱土などがきつく突き固められブロック上に堆積する。地山上面で鉄釘が出土したことなどから地山面の削り込みとブロック土の堆積は明らかに近年の所産である。位置関係からみて6トレンチ前面に及んだ搅乱部と後述する14トレンチ上部の客土層に連続するものである。したがって残念ながら、農道周辺つまり前方部前半部の頂部西縁～上半部は比較的近年の搅乱によって見た目以上に損なわれていることが推測される。

5. 11 トレンチ：前方部東面（第7・8・9・10図）

設定の意図：前方部東斜面の墳丘構造の確認を目的としてほぼ前方部頂から墳丘外に向けて設定した。立木により1mほど設置地点をずらしたが、墳丘中軸を挟んで、先年度調査で葺石・埴輪列を検出した2トレンチを折り返した位置にあたる。

設定位置：農道切断部の南約10mで前方部東斜面裾の方形壇の南側に接する位置にあたる。墳丘主軸ラインの東5m、K5杭南3mを起点に幅1mで主軸ラインと直交して設定。前方部墳丘頂部平坦面東縁から墳端傾斜変換点に至る東西延長1.5m幅1mの調査区である。なお調査区東端付近では、後述するように検出した平安後期火葬墓を確認するために若干調査区を拡張した。また夏期調査では13トレンチの設定にあたり本トレンチを再掘削して一部を拡張した。そのため調査面積は全体で17.4m²となる。

成果：当初予想したほどに墳丘外表設備の遺存状態は良好ではなかったが、葺石残部や埴輪樹立状況から、墳丘斜面に二段のテラスを設けていること、つまりこの部分が見かけ上三段に整えられていることが確認できた。なおこの部分では墳丘は頂部に至るまで大部分を地山削り出しで整形し、若干の置き土を盛ってテラス部分を整えている。ただし置き土部分は大部分崩壊し、葺石も基底石の一部が残るにすぎなかった。

第一段（墳端）石列

標高6.7.4m、主軸から1.5.9mの位置で墳丘規定を画する小段を検出した。掌大もしくは小兒頭大のやや扁平な円錐を立て、あるいは2～3段で横積みする。積み方は揃

わず使用礫のサイズに合わせて任意に積み上げて高さ 20 cm 内外の低い段をこしらえる。段基底ラインは厳密には墳丘主軸に並行せずに南に開き気味に延びている。なお 12 トレンチ拡張区南端付近で石列が屈折している。肝心の部分で 1 ~ 2 石が脱落しているが、後で述べる 12 トレンチの所見と合わせて、この部分がくびれ部に相当すると見られる。ただし屈折角度は非常に緩い。

石組は地山面を浅く削って据えられ、裏面に若干の置き土を詰める。これより外方は緩やかに自然地形に連なり古墳構造に伴う整形痕跡は認められない。この石列を墳丘基底とすれば本地点で前方部墳丘高は 5 m となる。この小段の上面が下段テラスとなるが、その勾配から推測して本来的には上部にもう 1 ~ 2 段配されていたものと見られる。

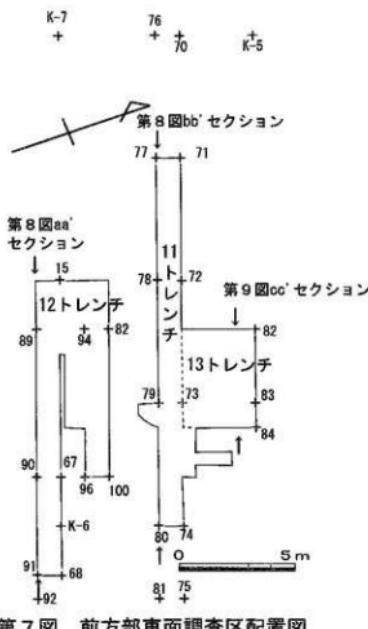
石列外方では葺石材と共に比較的多量の円筒埴輪・壺形埴輪片が出たが、いずれも上方からの転落と見られ、石列にそれらを立て並べた形跡は乏しい。

第二段葺石（葺石）

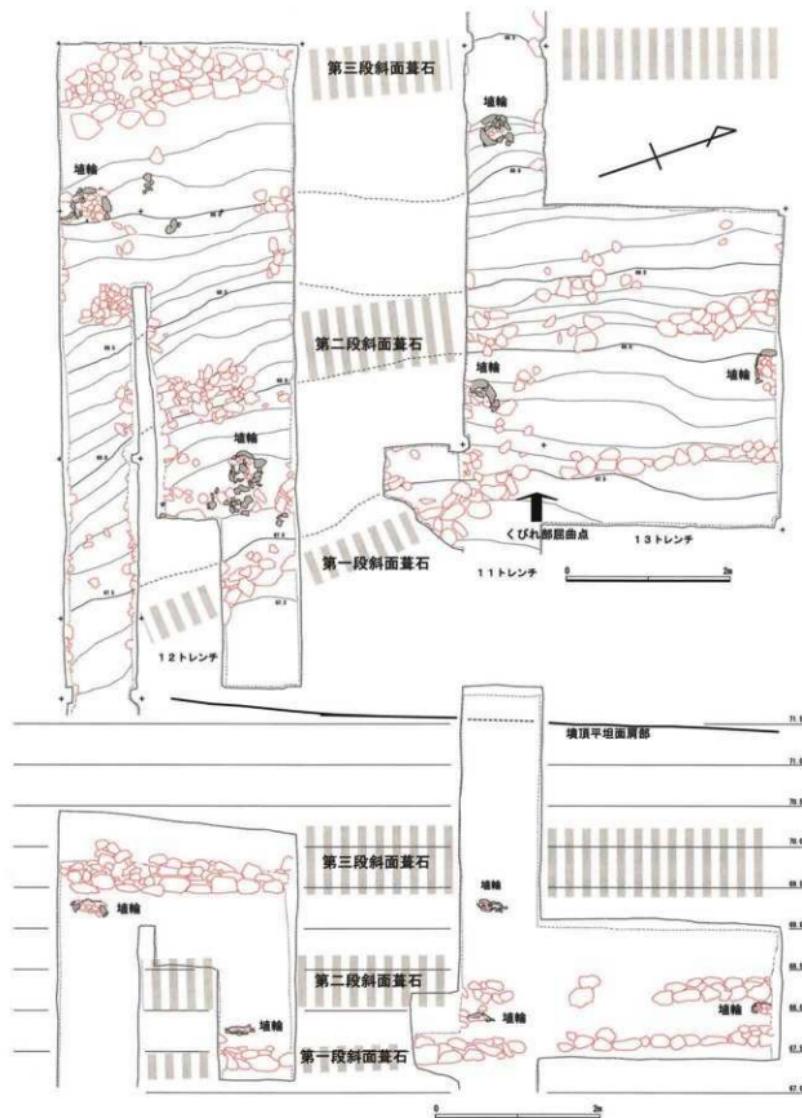
標高 6.8. 1 m. 主軸から 1.3. 8 m の位置で第二段斜面葺石の基底残部を検出した。墳丘第一段との比高 0.7 m. 前方部頂との比高は 4.3 m となる。拳大かそれよりも小さい円礫を使用して墳丘表層の若干の置き土に差し込むようにして据えるが特に面を揃えるわけでもなくやや乱雑な配置となる。第二段斜面は後述する上段テラスとの関係から比高 1.2 m. 斜面長 2.5 m 前後と推測されるが、やはり地山を削り出して若干の置き土で整えたものと見られる。なお墳丘西面の 2 トレンチで検出した葺石下端が標高 6.7. 9 m. 主軸から 1.4. 8 m を測り、東面の第二段斜面葺石とほぼ対応する関係にある。

下段テラス

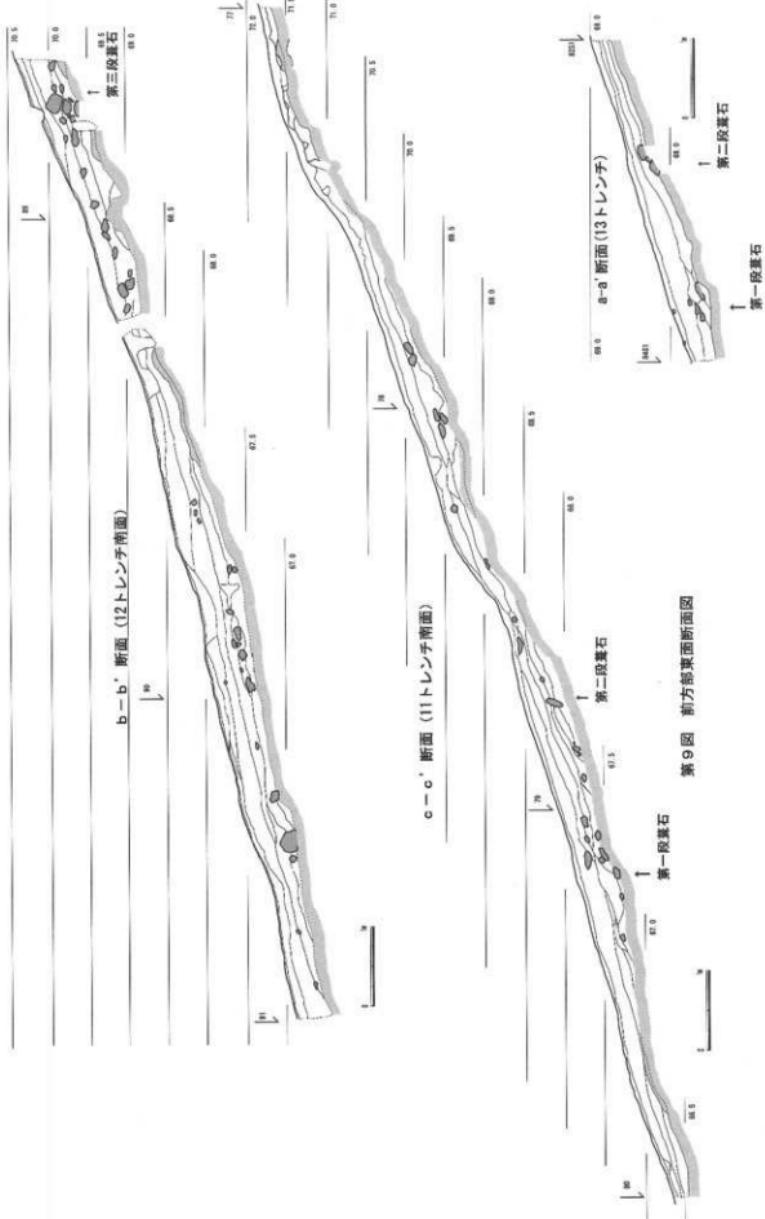
第一段・第二段斜面間の標高 6.7. 6 ~ 6.8. 1 m 比高 0.5 m 弱の緩斜面部分が下段テラスとなる。地山削り出し整形の上、うすい置き土で整えるが、上面は流出していると見られる。テラス面のやや奥寄りで第二段葺石基底から 0.4 m 離れて円筒埴輪 1 基の樹立を確認した。テラス上面の置き土に基底部を埋め込み内部に小礫を詰めて安定を図っている。



第 7 図 前方部東面調査区配置図



第8図 前方部東面調査区（11～13トレンチ）平面図・立面図



第9図 前方部東面断面図

上段テラス

地山面の傾斜変化と、半ばずり落ちた状態で検出した円筒埴輪基底部の存在から第一段テラス同様に若干の置き土で整形したテラス面の存在を推定したが、現状ではほぼ流出している。標高6.9、3~4m前後、主軸ラインから1.1m前後をはかる。規模・形状の詳細は不明である。円筒埴輪はテラス上面の置き土ごと第二段斜面に半ばずれ込んだ状態で検出した。やはり置き土に基底部を埋め込み内部に小礫を充填したものと見られる。

第三段斜面

上段テラスから墳頂までの間が第二段斜面に相当する。比高3m前後となる。上段テラスに転落した石材の存在から葺石施行は推定してよいだろうが、原位置にとどまるものではなく、どの程度充実していたかは不詳である。

火葬墓（第10図）

調査開始直後、トレンチ東部（東端から約2.5m）の表土直下で八稜鏡一面が裏返しで出土した。墳端の第一段石列の外約2mの地点で墳丘から転落した埴輪・石材が多く含まれる層序の上面付近であった。周囲を精査したが、土坑など八稜鏡が何らかの遺構に伴う徵証は見いだせず、全く遊離した状態であることが推測された。

その後、八稜鏡出土地点の北西0.5m付近で半ば1.1トレンチ南壁にかかるように須恵器壺を藏骨器とする火葬墓を検出した。墳丘東裾野の方形壇の南側面に近接する位置である。この周辺を拡張して墓壙の検出を進めた。墓壙は墳裾に堆積した流入土を切り込んで穿たれ平面形は東西0.65m南北0.6mのいびつな梢円形で、深さ0.2mのボウル状を呈する。底面中央に安山岩板石を据え、その上に口部を打ち欠いた須恵器壺を倒置して、掘り込み内に炭細粒を充填する。藏骨器内には碎いた焼骨を詰める。少なくとも歯・頭骨・指骨や大型の四肢骨幹部が認められる。調査範囲では周囲に被熱痕跡や骨片の散乱はみられない。また掘り込み内の中位に土師器杯4枚を伏せて配列する。逆位で据えられた須恵器底部は土坑上面から突き出す。これを覆うように若干の炭片を交える層が掘り込みより一回り大きく堆積する。また掘り込みの周囲には拳大の円礫が配されるようにも見えるが、もとより墳裾で転落石材が多く確証はつかめないがこれらの点から墓壙上部に若干のマウンドが存在した可能性は高いであろう。本火葬墓の年代は遺物の項で後述するように、藏骨器と共に土師器杯の型式から平安後期11世紀前半代と考えられる。

1.12トレンチ（第7・8・10図）

設定の意図：11トレンチで検出した二重の葺石・石列が後円部に向けてどのように展開するのかを確認するためにくびれ部寄りの部分に調査区を設定した。



第10図 火葬墓平断面図(11トレンチ)

設定位置：当初は 11 トレンチの北 4 m、主軸の東 1.2 m を起点に幅 1 m 延長 1.0 m で東西方向に設定したが、遺存状況が思わしくなく、11・13 トレンチからの連続を理解しにくかったため、木立を避けつつ南・西方向に順次拡張して、延長最大 1.2 m 幅最大 3 m 調査面積 2.6 m² となった。

成果：11 トレンチ同様に上下二段の狭いテラスを挟んで三段に整えられた墳丘斜面を検出した。第二段斜面葺石はほとんど流出していたが、第一・第三段斜面では比較的旧状を保っていた。この地点では第二・第三段斜面は墳丘主軸とほぼ平行して前方部から直線的に延びるが、墳丘基底を画する第一段は 11 トレンチ部分から緩く弧を描いて連続することが確認された。また上下二段のテラスでは各々円筒埴輪の樹立を検出した。

第一段石列

12 トレンチ拡張部東端で 11 トレンチから連続する第 1 段石列を検出した。基底に人頭大以上の大型の石材を置き、その上には小礫を 1~3 段積む。石の据え方は不揃いだが 30 cm ほどの高さを保つ。やはり地山面を多少削り込んで石材を据え裏面に置き土充當するようだ。11 トレンチ部分の基底石よりも大型の石材を使用しているようだが、狭い範囲での検出のため、そのまま後円部と前方部の差異とは言い切れない。緩やかに弧を描きながら南東一北西に延び、拡張区南壁で主軸との水平距離は 1.8 m となる。基底レベルは標高 6.7. 2~6.7. 3 m で北に向かってわずかに上がる。11 トレンチ拡張部と 1.5 m の間隔が開くがこの間で基底レベルは 1.0~2.0 cm ほど低くなる。

第二段斜面・葺石

後述する上下二段のテラス面の間で、散漫に葺石材が残存する部分が墳丘第二段斜面であるが、葺石はほとんど原位置をとどめず脱落している。またこの部分では第一・第三段斜面のように葺石基底に大型石材を据えた形跡はない。検出した葺石材はいずれも拳大の小振りなものばかりである。墳丘表層もかなり流出しているため正確な規模は復元できないが、上下のテラス面残部から推し量って第二段斜面は標高 6.7. 9~6.9 m、主軸から 1.2. 5~1.5 m のあたりとなるだろう。

第三段斜面・葺石

本トレンチでは第二段斜面が大部分流出していたのとは対照的に第三段斜面葺石はかなり良好な状態で検出できた。人頭大以上のやや横長で枕状の亜円礫を横向きに並べて基底とし、それより上には拳大~小兒頭大のやや小振りな礫を斜めに差し込むように積み上げる。幅最大 1.2 m 高さ 5.0 cm ほど、およそ 5~6 段分を検出している。基底は標高 6.9. 4 m を測り、前方部頂 (K 7 付近)との比高 3.4 m となる。葺石基底ラインは厳密には墳丘主軸方向よりわずかに南南東一北北西に斜行し、主軸からの水平距離は 1.1. 2~1.0. 6 m となる。

下段テラス

上述のように第二斜面基底が確定的ではないのでテラス幅の計測は困難だが、先の推測に照らせば、幅 2 m 弱程度と見られる。原状では 0.5 m 内外の比高をもった緩斜面であるが本来的には地山整形の後に若干の置き土でテラス面を整えたものと見られる。基底部を置き土に埋めて据えた円筒埴輪 1 基を検出した。やはり基底内部に小円礫を詰めて安定を図っている。これに隣接して菱形埴輪の口頭部および体部片がまとまって検出された。

一部は上段テラスからの転落片と見られるが、下段テラスで円筒埴輪と共に壺形埴輪を併用した可能性が高い。

上段テラス

やはり第二段斜面の流出が著しいため規模の推測は難しいが、第三段斜面葺石基底と樹立埴輪基部の検出によって存在が推測できる。およそ幅1.5~2m程度と復元できる。円筒埴輪の樹立状況からテラス面は地山整形の上若干の置き土を盛って整えられたと推測される。円筒埴輪の樹立状況は本トレンチ下段テラスや11トレンチの状況と異ならない。円筒埴輪片に伴って一定の壺形埴輪片を確認している点も下段テラスと同様である。

7. 13トレンチ(第7・8・10図)

設定の意図：11・12トレンチの成果を承けて、11・12トレンチで検出した石列・葺石が前方部方向にどのように展開するか確認するために設定した調査区である。11トレンチの所見から、この部分では第三段斜面の良好な遺存を期待できないと判断して第一段～第二段斜面の追求を主目的とした。

設定位置：11トレンチの南側に連続して主軸から東1.2mを起点に東西延長4m幅3mで前方部墳丘東側面下部に調査区を設けた。

成果：本調査区では隣接地点よりは多少良好な状態で墳丘第一段・第二段斜面葺石・石列と下段テラスを確認している。

第一段斜面

13トレンチの南端で一部が脱落しているが、11トレンチ拡張部までは連続して、墳端を画する第一段斜面石列を検出した。全体で延長約4.5mに達する。基底石としてやや大型の亜円礫を多くは横積みするが、北端部では拳大の小振りな礫で代用している。現状では部分的に2段、小型礫を使用した部分では3段分の高さ20cm内外が残る。13トレンチ範囲では基底レベルは標高6.7.55~6.7.6mとほぼ水平に延びる。主軸からの水平距離は1.5.2~4mでほぼ並行するが厳密にはごくわずかだけ西に振れる。もっとも基底ラインは必ずしも直線的ではなく中途にわずかな曲折が見られるので、このズレを積極的に評価することは難しい。

肝心な部分が脱落しているが、基底ラインを11・12トレンチから追いかけると、どうやら本トレンチ南端以南では緩く弧を描いて続き、これより北ではほぼ直線的に延び、ちょうど脱落部位あたりで緩く屈折するものと見られる。屈折角度はおよそ150°とひどく鈍いがこの部分を墳端くびれ部に相当する箇所と推測しておく。

第二段斜面

13トレンチ北端から約1.5mでは比較的良好な状態で第二段葺石基底部を検出できた。本トレンチ南半部では流出が著しく、若干の石材が遺存するものの明瞭な基底ラインを連続的に追うことは難しい。基底レベルは6.8.1mではば揃い、11トレンチの所見と合致する。前方部頂との比高は4.3mとなる。主軸から水平距離で1.3.5~6mで主軸ラインとほぼ並行するが、厳密にはやや北北西に振れるようにも見える。検出範囲では基底に人頭大のやや大振りな亜円礫の横に据え、その上にはやや小振りの礫を多く横積

みするが、この地点でもさほど整ったものではない。葺石は地山削り出し面を薄く被覆する盛土に差し込まれるよう配されたか、あるいは石積みと並行して裏面に土砂を充填したものと推測できる。他の地点と同様である。ただし 1・1・1 トレンチでは第二斜面葺石基底にこのような大型礫の使用は認められない。このように葺石施行は地点によって非常にむらがある。確実に原位置をとどめる葺石は基底から 2~3 段分高さ 30 cm 程度にすぎないが、少なくとも標高 6.8・6 m、主軸から 1.2・5 m までの幅 1 m 比高 0.5 m の範囲には散漫に拳大~小児頭人の亜円礫が認められる。これらの多くは多少滑落したものと推測するが、第二段斜面の葺石をある程度は反映するであろう。

下段テラス

1・2 トレンチでは他と違い第一・二段斜面の石列・葺石が比較的残るのでテラス幅の推測が可能である。現状で幅 1.5 m 弱、比高 0.3 m ほどの緩斜面をなすが、やはり表層は多少流出していると思われる。トレンチ北壁に接してテラス奥寄り部分（第二段基底石から 0.3 m）で樹立状態の円筒埴輪基底部を検出した。他地点と同様に内に小蝶を詰め基底部を置き土に埋め込む。

下段テラス面から第 1 段石列外方にかけて円筒埴輪・壺形埴輪片多数を検出したが、第一段石列の外側に埴輪を樹立した形跡はない。

8.3 トレンチ拡張部（第 3 図）

設定の意図：後円部墳丘の構造と外表設備の状態を確認するために、比較的後世の畠地開墾の影響が少ないと見られた後円部西斜面で設定した調査区である。

設定位置：後円部横断軸に沿って、昨年度に設定した 3 トレンチ東端から墳頂平坦面西縁までの間（32 杭~112 杭間）に、東西延長 1.5 m 幅 2 m で 3 トレンチ拡張区を設定した。

成果：残念ながら葺石やテラス面などの墳丘外表施設はほぼ完全に流出していたが、裁ち割り調査によって墳丘上半部が非常に堅密に突き固められた盛土により形作られていることが確認できた。

現況でも 3 トレンチ拡張区を設定した後円部西斜面は部分的な墳丘崩壊もしくは後世の小規模な改変によると見られる凹凸が著しいが、この状況はそのまま墳丘遺存状態に反映している。トレンチ東半部つまり墳丘上半部では表層腐食土層の直下で堅密な盛土面が検出できたが、墳丘下半では表土下で厚い褐色細砂礫の水性堆積層が認められた。盛土層はトレンチ東端から 10.8 m（中心点から 17.8 m）まで標高 7.0 m 以上で確認できる。したがって後円部頂に向かって多少地山面が隆起することを見込んで後円部墳丘では 4 m 内外の盛土厚を想定することができるだろう。現状ではこの地点で盛土末端が後世の改変もしくは墳丘の部分的な崩壊によって断ち切られているよう見えるが、本来的には今少しは盛土部分が広がる可能性がある。これ以下の部分は本来的に地山整形により墳丘を整えていたが、現状では上記したように局部的な抉れが連続し、その具体的な様相を復元することは困難だ。またトレンチ西半部で流土下層からやまとまって転落葺石材や円筒埴輪片を検出したが、その量は前方部各トレンチに比べ多くない。確実に原位置をとどめると判断されるものが全くなく後円部墳丘の外表設備に関する知見は得られなかった。

さて確認した盛土層の大部分では、a 炭片を多く混入する砂疊泥じり黒灰色粘土、b 明橙色粘土、c 多量の砂礫を混じえる明褐色粘土の3者を薄く互層状に積み上げている。部分的に地山の花崗岩パイ乱土をそのまま積み上げる箇所も見られるが、ごく局部的でしかない。盛土の各単位は短くあまり整然としていないが、いずれも非常に堅緻に突き固めており寺院基壇などのいわゆる版築土に硬度の点ではひけを取らない。こうした点で後円部墳丘上半部を構成する盛土は前方部の墳丘テラス面などの表層にしかれた置き度とは全く異なっている。

なお、昨年度の3トレンチ東端において地山直上で盛土層の可能性がある層序の存在を指摘したが、今回の調査でその部分を地山層の風化部分と理解することが適当と判断できたので訂正しておきたい。

9. 1 4 トレンチ（第3図）

設定の意図：農道切断部以北の前方部前半部分は改変が著しく現状では墳丘形態の観察は困難である。特に墳丘東側面の基底部付近は鶏舎設置時に完全に削り込まれて残存していない。西側面も分厚く建設残土を積み上げ現況で観察は困難であるが、その下部に墳丘基底部が残存することを期待して、前方部前半部の墳丘形態および外表設備を確認するために設定した調査区である。

設定位置：見かけ上のくびれ部と7トレンチで確認した前方部前端区画溝との中間地点にほぼ相当する主軸上に設定した118杭の西9mを南東隅として幅2m東西延長1.2mの調査区を設定した。昨年度設定した2トレンチと1.8mの間隔で並行し、トレンチ北壁は前方部前端区画溝から約1.2.5m南に位置することになる。調査区設置に先立ち、建設重機で農道部分を含めて墳丘西斜面に厚く盛られた建設残土・客土を4m幅で完全にはぎ取り旧表土層を露出させたが、残念ながら前方部前半部ではおよそ標高6.9.5m以下の墳丘上半部の西半が一端完全に削平されていることがこの段階で判明した。

成果：したがってこの地点で旧状をとどめているのは標高6.9.5m以下の墳丘基底部付近に限られるわけであるが、幸い墳丘第一段石列と第二段斜面葺石基底部、およびその間の下段テラス面を確認することができた。

第一段石列

主軸から水平距離1.6.4mではほぼ並行して第一段石列を検出した。トレンチ南端から1.5mほどが遺存する。基底レベルは6.8.0~6.8.1mとわずかに北に向かって迫り上がる。基底には幅50cm大の大型石材を横に並べ部分的にその上部に拳大の礫を重ね20~30cm大の段を形作る。

第二段斜面葺石

主軸から水平距離1.4.4~5mではほぼ並行して第二段斜面葺石基底列を検出した。トレンチ南端から約1.2mほど遺存し基底レベルは6.8.6.5~6.8.7.5mと、第一段石列と同程度にわずかに北に向かって迫り上がる。基底石は第一段石列よりやや小振りな人頭大の大型石材を概ね横向きに並べ、その上には小児頭大~拳大の礫を斜めに差し込むように重ねる。最大5段分幅60cmほどが残存する。なおこの地点では第一段石列を含め使用石材は安山岩自然礫ばかりであった。

下段テラス

第一段石列と第二段斜面葺石の間、幅1.5m比高0.4mほどの緩斜面が下段テラスとなる。他地点で確認した下段テラスに比べかなり狭くなっている。やはり地山整形の後に若干の置き土で上面を整えたものと見られる。トレンチ北半で第二段葺石基底と20cmの間隔で据えられた円筒埴輪基底部を検出した。他地点のテラス面に樹立された円筒埴輪とは異なり、地山面を浅く掘り窪めて埴輪基底を据え付けている。また他地点のように内部に小礫を詰めていない点も相違している。

円筒埴輪片の他、壺形埴輪体部片などが出土しているが量は多くない。

第4節 出土遺物の概要

1. 快天山古墳関係遺物（第11～14図）

今年度調査で確認した快天山古墳に直接伴う遺物には円筒埴輪・壺形埴輪および若干の土師器小形器種がある。昨年度の調査所見で存在を否定的に捉えた朝顔形円筒埴輪については後述するように判断を保留する必要が生じてきた。ただし器財形埴輪は今回も確認していない。

円筒埴輪（第11・12図）

（第11図1）

最上段（口縁部）から最上段突帶片。口径28cmを測る。淡橙色を呈し1～2mm大の比較的細かい石英・長石粒を含む。長さ約6cmのやや短い口縁部は鈍く外反して端部内面をわずかにつまむ。やや低めの突帶は上端を強くつまみ出す。外面一次タテハケ調整の後、口縁部は横ナデで仕上げる。内面は第二段相当部上端付近まで横ケズリ。最上段部はヨコハケ調整の後、軽く横ナデを加えるが、粘土帯接合痕を顕著に残す。

（第11図2）

突帶は剥落するが最上段（口縁部）から第二段に至る破片。口径39cmを測る。明橙色を呈し、口縁部外面に黒斑がある。約1/6周を残す。3～5mm大の粗粒の石英・長石粒の他、細かな赤色粒含む。突帶剥落位置から測って最上段幅は約9cmと本墳山上資料の中では長めの部類といえる。鈍く外反して端部内面を鈍く摘む。突帶貼付位置には約1.2cmの間隔で浅い方形刺突2ヶ所が確認できる。外面は一次タテハケ調整後、最上段には丁寧な横ナデを加える。内面は横方向の指ナデの後に、最上段部分には細かなヨコハケ調整を施す。

（第11図3）

最上段突帶部片。突帶部分で経38cmを測る。黄白色を呈し2～4mm大の石英・長石粒を比較的多めに含む。突帶は単純な台形を呈し、下端の貼付がやや甘い。第二段では突帶から2cm離れて方形透かしが穿たれる。外面一次タテハケ後、最上段は丁寧な横ナデ調整を加える。内面は第二段相当部分まで横ケズリ、最上段はヨコハケで仕上げる。

（第11図4）

最上段から第二段片であるが、口縁部を欠く。突帶部分で径41cmを測る。赤橙色を呈し2～4mm大の石英・長石粒とやや細かい赤色粒を多く含む。細身で突出度の高い台形突帶を付す。器壁はやや肉厚となる。第二段部に突帶から3.5cm離れて方形透かしを穿つ。

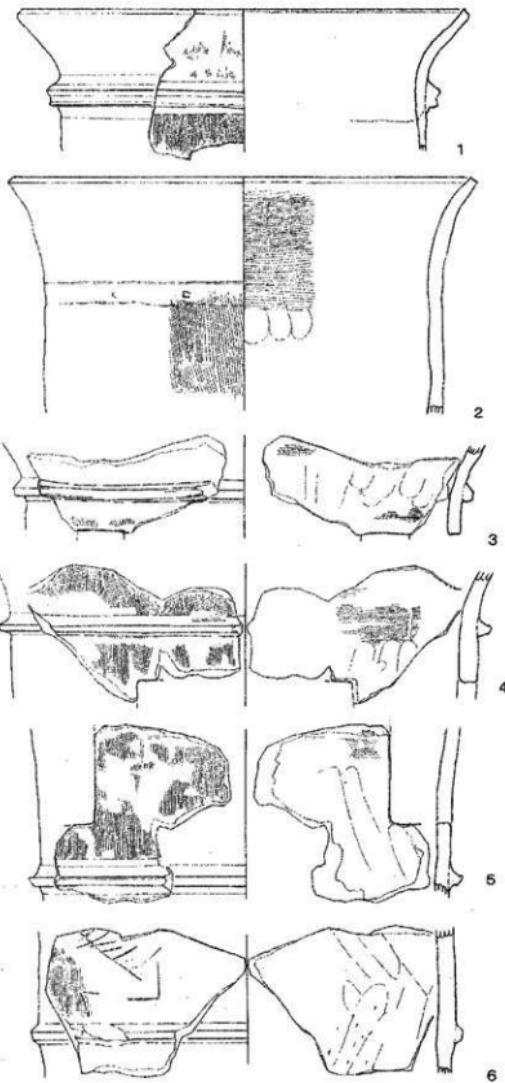
外面は一次調整タテハケの後、最上段を含め二次タテハケ調整を施す。
(第11図5)

中間段片であるが、内面調整から勘案して上方第二段・第二段突帯部片であろう。突帯部で計3.6cmを測る。明褐色を呈し突帯部分に黒斑が付く。帯から約3cm離れて方形透かしを穿つ。外面は一次調整タテハケ仕上げ、内面は縦方向の指ナデ仕上げの後上端にはヨコハケ調整が及んでいる。

(第11図6)

中間段片。透かし孔と内面調整から見て中位以下の部位であろう。黄白色を呈し細粗粒の石英、長石粒を多く含む。台形を呈する突帯は小振りで突出度も弱い。外面には二次タテハケ調整が認められる。内面は斜位の指ナデ調整の後に粗く縦に削るが器壁はやや肉厚である。さて本品には範描の細沈線によるやや複雑な記号的表現が認められる。上に開く「へ」字状の刻線一条と、それに交差する5~6条の不揃いな短刻線が見られる。いずれも鋭利な刀子状の工具で刻まれる。半ば以上

を欠損するため全体の構図は不明であるが、線刻文と重なるように穿たれた透かし孔の一部が残存する点が注意される。



第11図 円筒埴輪 (S=1/4)

(第12図1)

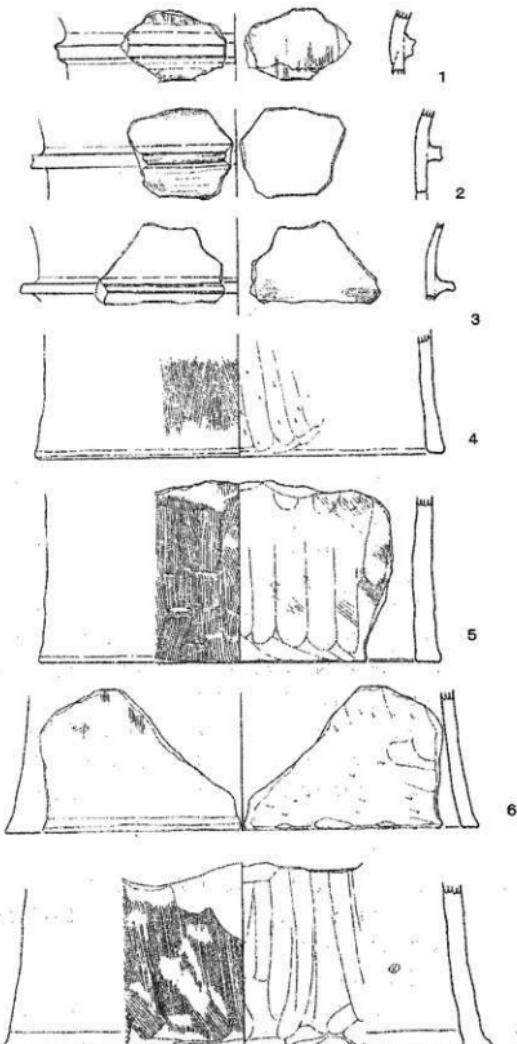
最上段突帯部片。復元計測では突帯部径3.0cmとなるが小片のため不安が残る。明橙色を呈し1~4mm大の石英粒を少量含む。やや低めの台形突帯は上端を強くつまみ出す。第二段部に突帯から2cm弱離して方形透かしを穿つ。外面一次調整タテハケ。最上段部の下端付近では二次調整の横ナデが認められない。内面は突帯部分まで軽く縦ヶざりを施す。上端にヨコハケ調整が僅かに見える。

(第12図2)

最上段突帯部片。外面黄橙色、内面鮮橙色を呈し、3~4mm大の粗粒の石英粒を多めに含む。外面に赤色顔料(ベンガラ)の塗布を認める。復元計測では突帯部径3.4cmとなるが、小片のため不安が残る。矩形で突出度の高い突帯は下端をやや強くつまみ出す。第二段に突帯から約2cm離して方形透かしを穿つ。一次タテハケ調整の後、最上段は丁寧な横ナデ仕上げ、第二段ではヨコハケ調整が確認できる。外面ヨコハケ調整を確認した資料は現時点ではこの一点のみである。内面は丁寧なナデ仕上げとなる。

(第12図3)

最上段突帯部片か。相当に薄く仕上げると共に突出度の高い鉄状突帯をもつことから通有の円筒埴輪と見なすには躊躇する資料である。突帯部分で径3.5cmを測る。橙色を呈し2~3mm大の石英粒。



第12図 円筒埴輪 (S=1/4)

赤色粒を多量に含む。突帯は細身ながら鉄上に強く突出し下端を引き延ばす。外面は磨耗のため調整不明、内面横ナデ仕上げとなる。

(第12図4)

基底段片。基底部径3.4cmを測る。黄白色を呈し、2~4mm大の石英・長石粒を多く含む。外面に黒斑をとどめる。内面ヘラ削りにより器壁は厚さ1cm内外と薄く仕上がる。外面はタテハケ調整。やや内傾気味に立ち上がるが、やはり自重で下端が潰れ内外に粘土がはみ出した形跡がある。内面は下端まで及ぶ縦ケズリ調整時にその部分も搔き取り、外面は最終段階に板状工具で押さえつけている。

(第12図5)

基底段片。基底部径3.4cmを測る。また本片では基底段は少なくとも1.9cmの高さを持つことが判る。全体に橙色を呈し1~3mm大の石英・長石粒を含む。器壁は厚く最大2cmを越える。ほぼ垂直に立ち上がるが自重で下端がやや潰れ、内外に不規則に粘土がはみ出す。そうした部分の処理は特に行っていない。外面はタテハケ調整、内面は粗く縦方向に指ナデする。基底面の観察から、幅広の粘土板を二重に巻き付けて基底部を整形したことがうかがわれる。

(第12図6)

基底段片。淡黄色を呈し2~4mm大の石英・長石粒を比較的多めに含む。基底部径は約4.0cmを測る。自重で下端が潰れた形跡があるが、外にはみ出した粘土を板状工具で器壁に押さえつけているようだ。僅かに内傾気味に立ち上がる。外面はかなり磨耗しているがタテハケ調整が読みとれる。上記の「底部調整」はハケ仕上げ後と見られる。内面は丁寧に横ケズリを施し、この結果器壁は厚さ1cm内外とかなり薄く仕上がっている。

(第12図7)

基底段片。黄橙色~明橙色を呈し2~4mm大の石英・長石粒少量と赤色細粒を多量に含む。基底部径は4.1cmを測る。自重で下端は潰れ外方に粘土が不規則にはみ出したままとなる。僅かに内傾気味に立ち上がり器壁は2cm前後と厚い。外面タテハケ調整、内面は粗い縦方向の指ナデ仕上げとなる。

今年度の調査でも円筒埴輪の全形を推測しうる資料を得ることはできなかった。樹立状態のまま検出した基底部の一部を除き全周する資料ではなく、透かし孔配置の詳細や段構成の復元は今後の課題となる。しかし今までの資料を通して円筒埴輪の基本形状にはさほど差異はない。昨年度報告で紹介した点を含めてあらためて全体に共通する特徴を以下にまとめておこう。

①口縁部は最上段基底段や中間段に比べ短めとなる。多くは中間段の1/2以下の高さとかなり短いが、まれに2/3程度に達するものも含まれるが、この部分でかなり外反することには変わりがない。

②口径は概ね3.5cm前後、基底部径は3.0~3.3cmでかなり揃っている。

③透かし孔は口縁部(最上段)と基底段を除く中間段全てに穿たれる可能性が高い。

④透かし孔の圧倒的大部分は縱長の長方形を示し、縱方向はほぼ段幅一杯となる。昨年度調査資料では三角形透かし孔の可能性をもつ細片若干が認められたが、今年度資料では今のところ三角形、その他の長方形以外の透かし孔形状は確認していない。

⑤透かし孔の間隔から配置をある程度推測しうる若干の資料では、各段に四方~五方を穿つものと見られる。また透かし孔位置は縱方向に揃っている。もっともこうした状況を

確認できる資料が限られるので、全体に共通するとは断定できない。

⑥突帯は概ね突出度が高く貼付は非常に念入りであるが形状は一律ではない。また突帯貼付位置の器壁に一定間隔で浅い方形刺突痕が連続する例がある。

⑦少數の資料では赤色顔料（おそらくベンガラ）の塗布が確認できる。また基底段にそれが及ぶ資料も存在する。

これまで確認した快天山古墳出土円筒埴輪では、一応は上記した①～⑦の共通点を持つが、その全体は発色及び胎土の特徴から二群に大別することができるし、この区別はある程度整形技法の差異とも関連している。まず発色では黄白色系統を呈するグループ（a群）と橙色系統を呈するグループ（b群）がある。前者a群では3mm前後の粗粒の長石粒、石英粒が目につくが、混入度合いはさほど多くない。後者b群ではa群と同様の胎土が観察されるグループ（b-1群）と、全体に混入砂粒がひどく多いグループ（b-2群）が見られ、その一部では加えて2～3mm大の磨滅した赤色粒を多く含むものがある。b群、とくにb-2群は今少し細分できる余地があるが、現時点ではこの程度に大まかに捉えておきたい。さて黄白色系統のa群では例外なく最上段を除く内面の大部分にケズリ調整を施し、その結果器壁は薄く仕上がっている。外面は突帯貼付前に全体をタテハケで整え、後に口縁部（最上段）に限り丁寧な横ナデでそれを消す。口縁部内面にはヨコハケ調整を加えている。また快天山出土の円筒埴輪はいずれも正位置に据えて基底部から順次粘土帯を積み上げていくとみられるが、その結果、自重で基底部が潰れ不規則に粘土がはみ出たものが多い。しかしa群の一部では最終段階でそうした部分を板状工具で器壁に押しつけ整形する例がある。

さてb群のうち、b-2群と一括したグループのもっとも目に付く特徴は内面のケズリ調整を全く欠く点にある。中間段で内面第二段以下は指ナデで仕上げている。この結果、器壁はa群より厚く全体に鈍重な感を与える。底部整形を除く外面調整と口縁部内面のヨコハケ調整は多くの場合共通するが、一部では突帯貼付後にあらためて外面に二次タテハケを加えるものがある。

一方b-1群では調整技法の点で全くa群と一致するものが多い。実際同一固体で部位により明確に発色をえゝ縞模様を呈する固体もまれに認められ、両者の緊密な関係を示している。少数例では外面に二次ヨコハケ調整が認められるが、小片のためその充実の度合は不詳である。

壺形埴輪（第13図）

（第13図1）

口径4.1cmを測る大型の二重口縁壺口縁部片。約1/3周を残す。黄白色を呈し口縁端に黒斑が見える。4mm以上の粗粒石英粒を少量含む。やや丸みをもって開く受け部を持ち、立ち上がり部は強く外反して開く。端部はごく僅か肥厚した面を持つ。屈曲部には断面蒲鉾形の小突起が巡る。器面は荒れているが内外面横ナデ仕上げと見られる。二重口縁壺の中では一際大型の固体で、同時期の日常的な壺形態をそのまま埴輪化したと見られる他個体とは様相を異にするものである。

（第13図2）

口径約3.2cmを測るやや小振りの二重口縁壺口縁部片。淡黄色を呈し2～3mm大の石英

粒少量を含む。強く折り返して大きく開く口縁部は薄手。上端付近でやや屈曲して端部は小さくつまみ出す。内外面横ナデ仕上げ。

(第13図3)

二重口縁壺口径部片だが、口縁立ち上がり部を欠く。黄白色を呈し2~3mm大の石英粒をやや多めに含む。推定口径は30~35cm程度であろう。短めの直立する頸部から強く折り返して口縁受け部は水平に開く。立ち上がり部は薄手で強く外反するようだ。屈曲部は強く張り出す。頸部外面に斜位のハケ調整をとどめる他は横ナデ仕上げ。

(第13図4)

口縁端が磨耗しているため緻密には二重口縁壺の疑いも捨てきれないが、單口縁広口形態と見た方が素直であろう。その場合口径は21cmとなる。

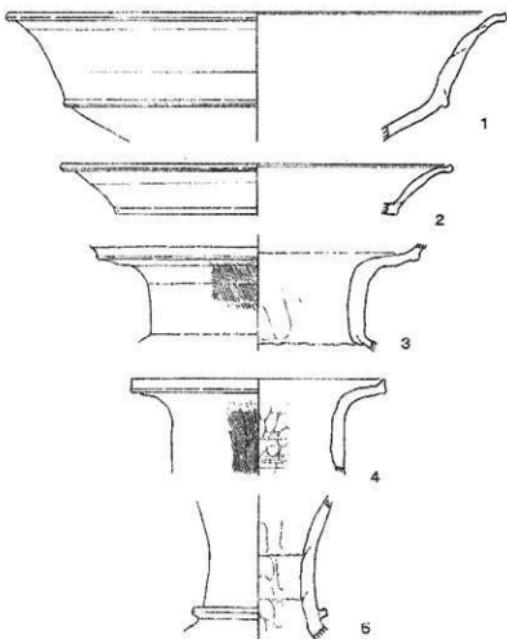
約1/6周強を残す。淡黄色を呈し2~3mm大の石英粒を少量含む。直立する頸部から緩やかに折り返して口縁部は短い。端部は小さく垂直につまみ上げ、下端も小さく張る。口縁部内外面は横ナデ仕上げだが、頸部外面には緻密なタテハケ調整をとどめる。頸部内面には指押さえ痕をよく残し下端は粗い横ナデが加わる。

(第13図5)

他の中大形壺とは胎土・形状を異にし、壺形埴輪に分類することには躊躇する資料である。暗褐色を呈し2~3mm大の石英粒を多量に含む。外反気味に立ち上がる頸部片で基部に突出度の高い細身の矩形次第一条が巡る。外面横ナデ仕上げで内面は指押さえ痕を残す。こうした特徴の中形壺は兵庫県西条52号墓や香川県尾崎西ST24号墓、弁天島積石墳などどちらかといえば播磨灘沿岸地域で見られるが、製作地を細かく限定することは困難だ。また奈良県箸墓古墳にも類例がある。ただし以上の諸例は弥生後期後葉~古墳前期前葉に位置付けられ、本墳の年代観には合致しない。

その他土師器

いずれも細片のため、固化できなかったが、埴輪類とは区別できる少数の土師器類が出土している。うち少なくとも一点は、直立する頸部から口縁折り返し部にさしかかる部分



第13図 壺形埴輪 (S=1/4)

と推測しうるので、小形の広口壺と見られる。他の多くは細片化した体部片であるが、比較的張りが強くかつ薄手で外面ハケ調整、内面はケズリないしは顕著な指押さえ痕が観察できるものが多い。小形の壺もしくは甕であろう。今のところ高杯・鉢類など飲食器類は確認していない。

以上の資料は、昨年度提示した編年観=集成編年3期と矛盾するものではない。

2. 火葬墓関連遺物他（第14図他）

八稜鏡（写真7）

面径8.3mmを測り、内区厚2mm、外区厚2.5mmと小形かつ薄手の八稜鏡である。「へ」字に折れ曲がり外区・外縁の一部を欠損する。多くの亀裂が走り相当に劣化が進んでいる。また錫化が進行し表面に細かな砂粒が多く固着させているが、纖維あるいは木質痕などは観察できない。

外縁では鈍く断面三角形に隆起するが、頂部はやや丸みを帯び、この部分で厚さ4mmを測る。外郭は八角形を呈するが長さ2~3.3mmを測る各辺は僅かばかり弧を描き、稜部の突出は強くない。稜間（各辺）中央では外縁隆起部がごく鈍く内側に突出する。幅8mmの外区は厚2.5mm、素文で厚2mmを測る内区との境に僅かな段を持つ。劣化のため不鮮明であるが内区には鉢を巡り対抗する位置で外向きに飛翔する二鳥と、その間に藤状の草花が肉彫り風に表現される。鉢は長8mm幅6mm厚5mmの楕円形を呈し長辺に直交して鉢孔を穿つ。鉢座の表現はない。

片桐孝浩氏のご教示によれば、本鏡は外縁の形状等から平安中期に編年される可能性が高い。

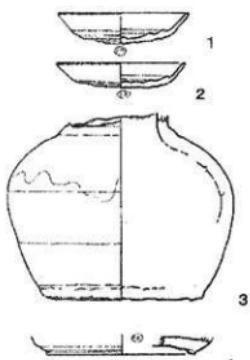
蔵骨器（第14図3）

比較的寸詰まりな体部でやや肩を張る。体部高13.4cm、最大径18.4cm、底部径13cmを測る。器壁は全体に1cm内外の厚みを持つ。口頸部は基部から打ち欠く。焼成は堅緻で全体に明灰色を呈する。器表全体に薄く釉がかかり光沢を帯び、さらに肩から濃緑色の釉が厚く垂れる。砂粒は目立たない。外面全体は回転ナデで整えるが基底部に一条の接合痕を残す。内面では同様の接合痕を三段以上留める。

佐藤竜馬氏のご教示によれば、形態・焼成など総合的に見て本品は十瓶彦須恵器壺で11世紀代に位置づけられる可能性が高い。

墓壙内出土土師器4点のうち2点である。他2点も法量・形態などこれらと同巧である。

細粒の混入はきわめて少ない。12図1は口径10.4cm深さ2cm、第14図2は口径10.7cm深さ2.5cmを測る。底部はやや肉厚で口縁部は強く外傾して比較的まっすぐ伸び、端部は丸く収める。底部外面には回転範切り痕を留める他は回転ナデで仕上げる。これらは法量・形態から、11世紀後半と推定される杯と皿の器種土師器杯両者とも黄灰色を呈し、分化以前の過渡的な形態と評価され



第14図 火葬墓関連資料他 (S=1/4)

る土師器杯C類に相当すると見られる。その点から10世紀後半～11世紀前半に位置付けられる。以上の編年観は佐藤竜馬氏のご教示に拠った。

3. その他

この他、火葬墓周辺の11～13トレンチの墳丘裾部あたりから今回図示していないが杯類および鍋もしくは長胴壺と見られる土師器片若干が出土している。今年度検出した火葬墓の共伴資料に近い年代を推測しうるものであるが、そうした資料の散布範囲からこの時期の他の遺構が所在する可能性を示唆するものである。

また前方部前端付近の7～10トレンチでは昨年度の1・6トレンチ同様に8世紀後葉に位置づけうる須恵器高台付杯3～4個体分の破片が出土している。うち一点を図化掲載した。(第14図4) 他地点でも同時期と見られる須恵器片ごく少數が見られるが、今のところこの時期の資料は前方部前端付近にまとまる傾向を指摘できる。

第5節 2002(平成14)年度調査のまとめ

ここで昨年度成果をも踏まえながら、今年度の快天山古墳に関する成果を簡単にまとめさせておきたい。なお昨年度概報で確認した集造時期、古墳時代前期中葉後半の集成編年3期という位置づけは新たに出土した埴輪資料からも支持しうるもので、現時点での変更の必要はない。

1. 墳丘規模(第15図)

今回、昨年度の推測を追認する形で前方部前端を確定することができた。またあらたに東面のくびれ部と前方部側端を捉えた。立地や現況の墳形などを勘案すれば昨年度の西面・南面調査の墳端位置に関する所見と矛盾するものではない。墳丘各部数値は昨年度提示したものを修正する部分は多くないが、あらたに前方部幅(中位付近)と前方部長(くびれ部～前端間)を示すことができる。以下にそれをまとめておく。

墳長 100.4m

後円部径

南面半径(中心点～4トレンチ推定墳端) 37.2m

西面半径(中心点～3トレンチ推定墳端) 29.2m

くびれ部半径(中心点～東面くびれ部) 31m

前方部長(東面くびれ部～前端溝) 35.5m

前方部幅(2・11トレンチ部分) 31.8m

後円部高 南面から 11m

西面から 10.5m

くびれ部から 8m

前方部高 前端部現存高(前面区画溝底面から) 0.4m

中位部高(11トレンチ) 約5m

2. 墳丘形態と外表装飾について

形態上の特色は一言でいえば、後円部丘の壮大さに比べて前方部がひどく矮小な点にあ

る。特に前方部が後円部径のほぼ $1/2$ と矮小であることが注意される。その一方で前方部幅は後円部径の $1/2$ とかなり広い。こうした点も影響してくびれ部の接合角度はひどく弛緩したものとなっている。この形状の由来は今後慎重に検討を進めなければならない問題である。佐紀古墳群など、前期後半期における畿内中枢部のやや前方部が短小な前方後円墳の築造企画に近似することを指摘する意見もあるが、むしろ様々な点から見出される前方部作出の簡略化傾向との関係をより考慮したい。前方部の形態は旧地形に大幅に依拠し、整形を最低限にとどめた結果、このような精良とはいがたい形態に至ったものと現時点では推測する。

これまでの調査で確認できた外表装飾設備の概要は次のとおりである。

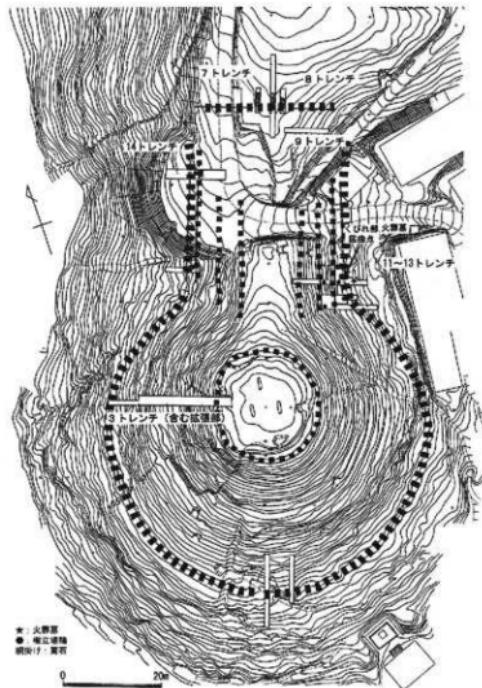
段築 前方部側面 3段（テラス幅1.5m前後）

前面 不明

後円部 4段？

葺石 各段斜面部に敷設 テラス面なし 墳頂面不明

埴輪配列 第一段・第二段テラスに配列（3~4m間隔） 墳裾なし 墳頂部不明



第15図 快天山古墳墳丘想定図

斜面テラスの第一段は、高50cm未満と低基壇状を呈するもので、この段については東面くびれ部で前方部から後円部に連続することを確認している。第二段テラスは前方部斜面のほぼ中位に位置するものである。後円部の第三段テラスは3トレンチ拡張部で、墳丘面の僅かな傾斜変換から存在を推測するものである。この推定が正しければ同テラスは前方部頂面から連接するものと思われる。現時点では確証に乏しいが、可能性を指摘しておきたい。こうして見れば、きわめて低い第一段テラスを本来の墳丘段とは区別する考え方もあるが、この部分にも第二段テラスと同様に埴輪を配列しており、ほとんど同化しているといえる。

前方部では地山整形時にテラス部分の芯となる緩斜面を作り出し、斜面部を含めて薄く置き土を盛って形を整えている。斜面部ではこの部分に差し込むように石を葺く。後円部墳丘上半の盛土部分でも、墳丘芯部を構成する緻密な盛土の表層に同様に薄く置き土をして形を整えているようだ。こうした脆弱な仕上げ工法が、テラス・葺石の大幅な崩壊を誘発しているのかもしれない。

上に述べたように埴輪配列は相当に疎かで確認部分では3~4m間隔となる。またいずれの地点でも円筒埴輪と壺形埴輪は混在して出土するので、部位によって両者を使い分けたとは考えがたい。むしろ円筒埴輪上に壺形埴輪を据えた可能性が高い。

葺石は基底に人頭大のやや大型の石材を主に横向きに据え並べ、その上部に拳大程度のやや小型の角礫・亜円礫を差し込むように、墳丘斜面に応じた勾配で一重に積み上げる。積石墳や前期前半段階では盛土墳を含めて本地域で一般的に観察される石垣状の垂直な積み方とは異なり、よりスタンダードな様態を探ることは興味深い。ただし前方部前面や同東西の一部など、どちらかといえば見えにくい部位では積み方が多少粗雑化する傾向がある。また円筒埴輪の基部は多くの地点では既に述べたテラス面の整形と同時に、置き土に埋め込み、さらに内部に小礫を充填して安定を図っている。わずかに前方部西面の14トレンチ検出埴輪1基では浅い掘り方をテラス面に穿ち据えている。ここでは小礫の充填も認められない。

3. 前方部前端区画について

これまでの調査で確認した前方部側縁の墳端部に比べ、前端部の造作がひどく簡略化であることは否定できない。墳丘中輪付近ではわずかに現存幅3.4m深さ0.4mの浅い区画溝で外方との遮断を図るにすぎない。もちろん墳頂部では一定の削平・変更を考慮しなければいけないが、1950年調査時作成の墳丘測量図と比較すれば爾後の削平はせいぜい1m内外に収まる可能性が高い。したがって前端区画が本来、簡略的であったことは否定できない。この点、例えばほぼ同時期の愛媛県相ノ谷1号墳では尾根線を深く掘削して側縁部に引けを取らない顯著な前端区画を作出している様相とは対照的である。ところで前方部内側縁のはば半ば付近に位置する14トレンチにおいてくびれ部寄りの2トレンチから連続し、かつ同様の構造の墳端および斜面外表の施設を検出している。こうした側縁部の構造と簡略的な前端区画がどのように接合するのか、あるいは前端に達することなく中途で側縁墳端施設が終息してしまうのか、今後追求を図るべき部分である。もっとも側斜面部と同様の段築構造が前面斜面に連続することはまず期待できないであろう。

また前方部前端付近ではこれまでのところ盛土を一切確認していない。上に述べたように1m内外と推定される概削平部分で若干の盛土が付加されていた可能性までも直ちに否定することは困難であるが、後に述べるくびれ部~前方部南半の状況を加味すればこの部分の墳丘構築は専ら地山整形によるものと見てよいだろう。

このような簡略的な区画でありながらも7トレンチの所見では墳丘前端部にもある程度の葺石施工と埴輪樹立が及ぶ可能性を示している。ただし7トレンチの状況から勘案して使用石材、設置範囲もまた相当に簡略化された内容であったことが推測される。

4. 墳丘構築

墳丘の南寄りの部分、つまりくびれ部に至るまでの前方部全体は主に自然地形を削り整

えることで整形している。一方、後円部墳丘では、3トレンチ拡張部の所見が示すように中程で墳丘上半部（最大厚は5m程度にまで達する可能性がある）は盛土によるが、裾部はやはり地山を削り込み整えている。旧地山の傾斜に合わせて後円部南半では一層盛土部分の比重が高まるであろう。さて墳丘盛土は築成の緻密さと用土で3種類に分類できる。既に述べたように後円部墳丘の要所は灰土と粘土、および肌理の粗い砂質土を緻密に互層状に積み上げる。これが第一のグループである。第二に、この間に花崗岩バイ乱土の組織を残した地山土をやや粗く積み上げている。これらで後円部墳丘の芯部を構成している。その上で化粧土ともいべき若干の置き土でテラス面を整えると共に、葺石裏込め土を構成する。この部分の土質はあまり締まりがなく前二者ほどに緻密ではない。多くの部位でこの表層土が地滑り状に崩れ落ち、外表のテラス面や葺石部を破壊している。



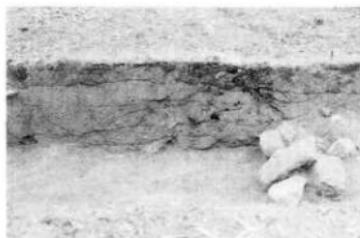
図版1 第7～9トレンチ全景（北から）



図版2 第9トレンチ全景（東から）



図版3 第7トレンチ全景（北から）



図版4 第7トレンチ前端区画溝南肩（西から）



図版5 第12トレンチ第三段斜面葺石（東から）



図版6 第11～13トレンチ全景（南から）

写真1 前方部前端調査区・前方部東面調査区1



図版7 第12トレンチ第一段斜面葺石（東から）



図版8 第11・13トレンチ第一・二段斜面葺石



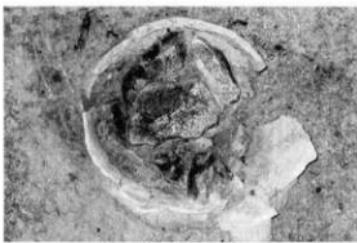
図版9 第11・12トレンチ第一・二段斜面葺石（北から）



図版10 第一段斜面葺石（北から）



図版11 第11トレンチ第一段斜面葺石屈折部



図版12 第13トレンチ第一段テラス埴輪設置状況

写真2 前方部東面調査区2



図版13 火葬墓墳半裁状況



図版14 火葬墓墳掘下状況



図版15 火葬墓墳完掘状況



図版16 火葬墓墳完掘状況



図版17 第11トレンチ火葬墓検出位置（丸印の部分）

写真3 前方部東面 火葬墓

第3トレンチ拡張区



図版18 第3トレンチ拡張区全景（西から）



図版19 第3トレンチ拡張区盛土立割状況（東から）

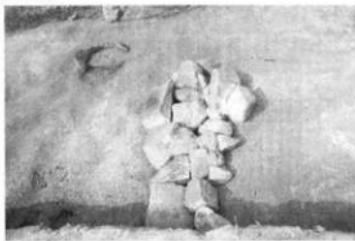


図版20 第3トレンチ拡張区墳丘上半部の盛土

第14トレンチ



図版21 第14トレンチ全景（西から）



図版22 第14トレンチ第二段斜面葺石・樹立埴輪（南から）

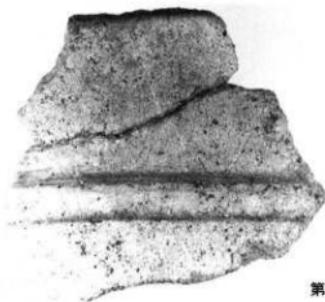


図版23 墓輪設置状況

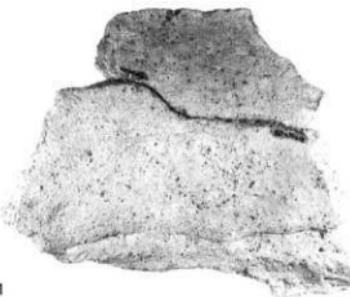


図版24 第14トレンチ第一・二段斜面葺石（西から）

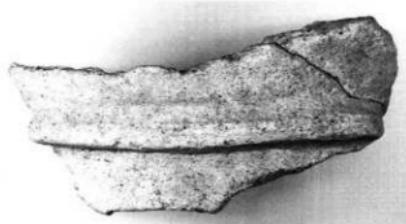
写真4 第3トレンチ拡張区・第14トレンチ



第11図-1



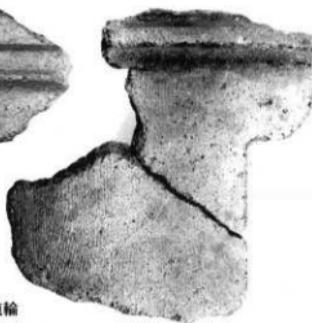
第12図-3



第11図-3



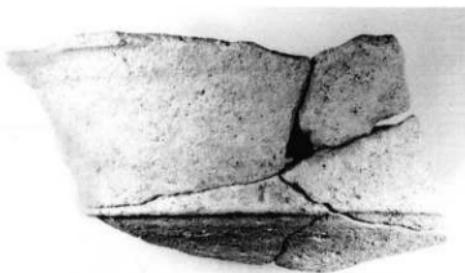
第12図-1



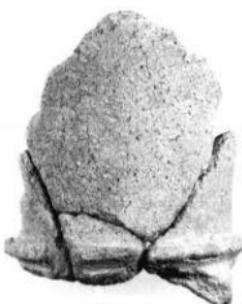
第11図-5

第11図-4

図版25 円筒埴輪
写真5 出土遺物1



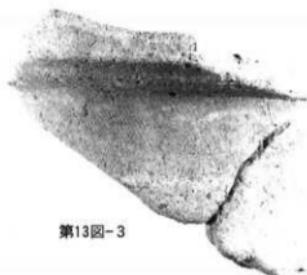
第13図-1



第13図-5



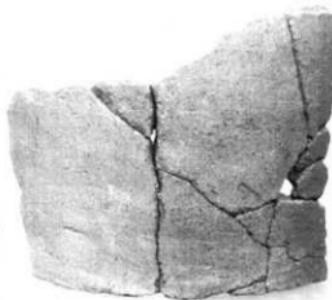
第13図-4



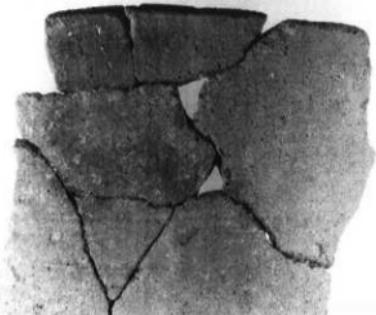
第13図-3



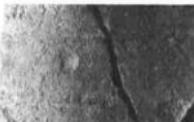
第13図-2



第12図-5



第11図-2

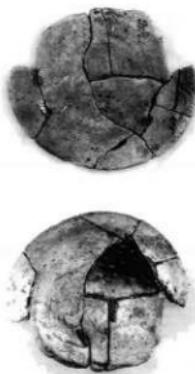


図版26 壺形埴輪・円筒埴輪

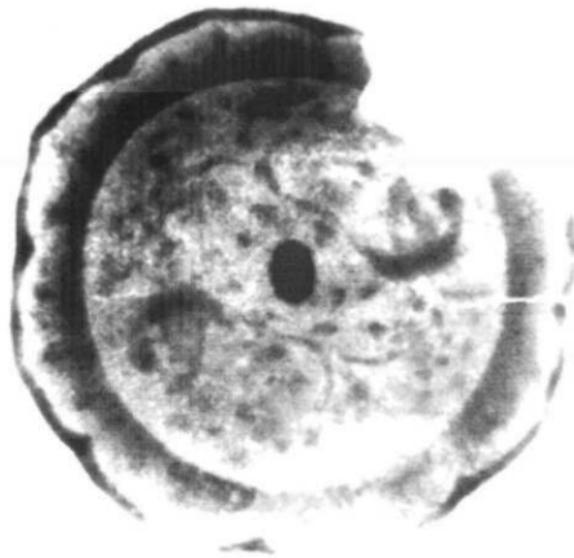
写真6 出土遺物2



図版27 藏骨器（第14図-3）



図版28 墓壇内出土土師器皿（第12図-2）



図版29 八稜鏡

写真7 火葬墓関連遺物

第Ⅲ章 まとめ

綾歌町では、平成8年度から国庫及び県費補助事業により綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても継続して実施することになった。

今年度については、栗熊東字若狭地区快天山古墳を対象に調査を実施した。

快天山古墳は、昭和25年（1950）香川県教育委員会によって主体部を中心とした発掘調査が実施されており、その内容は、史跡名勝天然記念物調査報告第十五（1951）で報告されている。

さらに、翌26年京都大学考古学教室によって再調査が実施された。その報告書はこれまで未刊となっていたが、元京都大学教授樋口隆康氏のご厚意により昨年度発刊を迎えるに至った。

今年度の調査は、前方部の規模及び構造、また、くびれ部の形態及び後円部の外表施設の確認を目的としており、拡張を含む計9本の試掘トレンチによる墳丘確認調査を実施した。各トレンチ共に断面土層及び包含遺物による遺構分布確認調査を行った。

この結果、前方部前端では昨年度設定した第1トレンチの両側に設定した第7、8トレンチで、第1トレンチで検出した浅い溝に続く溝状の遺構を確認した。また、西側面に設定した第14トレンチで墳端と考えられる第1段目葺石と第1段目テラス及び第2段目葺石の基底部を確認した。更に東側くびれ部に設定した各トレンチの内容を総合すると前方部は3段築成で各段斜面部には葺石が葺かれており各テラス部には約3～4m間隔で円筒埴輪が立て並べられていることが確認できた。

これらのことから快天山古墳の前方部は長さ約3.6m、幅約3.2mの規模になることが確認された。

後円部に設定した3トレンチでは、外表施設に関するものは殆ど確認できなかったが、後円部の上半部が盛土で構築されていることが判った。

今年度の調査では、墳丘形態における全容の解明とまでは至らなかつたが、次年度も継続して確認調査を実施し、構造等の内容をより明確にし、早期の整備を目指したい。

以上、今年度は学術調査として快天山古墳の測量調査及び墳丘確認調査を実施した。

快天山古墳の調査については、今年度の成果だけでは不足部分があり次年度も継続的に調査を実施し、史跡指定に向けた資料整備を行うとともに、保護・活用に向けた体制強化を進めていきたい。

また、今後の開発についても、この調査成果に基づき的確な遺跡の保護についての、提示をするとともに、事前協議を進めていき、文化財行政の活用・保護についての貴重な資料となるべく努めたい。

報告書抄録

ふりがな	あやうたちょうないいせき はっくつちょうさ ほうこくしょ							
書名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成14年度国庫補助事業報告書							
卷次	2003.3	シリーズ名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書	シリーズ番号	第7集			
編著者名	近藤 武司・大久保 徹也							
編集機関	綾歌町教育委員会							
所在地	〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西 1638 Tel.0877-86-5963							
発行年月日	2003年3月31日							
頁数	例言・目次等	本文	図版	挿図	総頁			
	5頁	37頁	40枚	15枚	42頁			
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		市町村	遺跡番号	°' "				°' "
快天山古墳	綾歌町栗熊東 字若狭 916-1	37384	00003	34度 13分 57秒	133度 53分 30秒	2002.4.2 ～ 2003.3.25	142	遺跡分布調査
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
快天山古墳	古墳	古墳時代前期	墳丘 剖竹形石棺 葺石	円筒埴輪 壺形埴輪 八棱鏡				

平成14年度国庫補助事業報告書
綾歌町内遺跡発掘調査報告書

平成15年3月31日

編集・発行 綾歌町教育委員会

綾歌郡綾歌町栗熊西1638

電話(0877) 86-5963

印刷 四国工業専門校